

人文科学論集

第 4 5 輯

1997年12月

## 東欧史が教えてくれるもの ——「ヨーロッパの裏庭」への視点——

薩 摩 秀 登

### 1、ヨーロッパの周辺部への感心

近年、日本でヨーロッパ史の研究をめざす人々の関心は、イギリス、フランス、ドイツを中心としたいわゆる西欧地域への集中を脱して、南欧、北欧、東欧など周辺の地域へと広がりつつあるといわれている。これは、単に研究者の数が増えて関心領域が広がったとか、西欧はあまりに研究が蓄積されたので新しい研究者の入り込む余地がなくなったとかいうだけの理由によるものではないであろう。

そもそも明治以来の日本にとってヨーロッパは一刻も早く到達しなければならないモデルであった。中でも西欧は、アメリカと並んで、世界をリードする最も先進的な地域であり、日本人にとってヨーロッパとは、とりもなおさず西欧諸国のことであった。しかしこうした西欧中心主義は、日本だけの現象であったわけではない。当のヨーロッパにおける歴史研究でさえ、いち早く市民社会を成熟させ、国民国家を完成させ、近代的産業を育成させた西欧諸国こそがヨーロッパの主流であり、他の地域は何らかの理由で脇にそれ、逸脱した歴史を歩んだという考えに、かなり強く影響されていた。そうした見方に反省を加え、主流のヨーロッパと非主流のヨーロッパという区別そのものを見直そうとする動きは、今ようやく進められているといってもよい。その背景には、近代西欧の生み出した合理主義自体に再検討が必要とされていることのほかに、東西冷戦構造の崩壊以降、ヨーロッパ連合の拡大が現実の課題となり、「多様なヨーロッパ」の存在が再認識されていることも、考えることができるであろう。日本でもまた、西欧を研究するだけではヨーロッパを理解するには不十分であって、一見、中心から取り残されたように見える地域をも視野に納めることによって、より多角的な視野からヨーロッパを見つめることができるという認識が広まってきた、というべきであろう。

しかし、そうして視野を広げることによって何が見えるようになるのであろうか。もちろん、今まであまり重視されてこなかった地域を研究することによって我々の知識や教養が豊かになるだけでも、重要な成果だという考えもある。その意味では、我々はヨーロッパやアメリカだけでなくどのような地域に対してももっと関心を向けるべきであって、あまりに欧米中心になり過ぎていた日本人の「国

際理解」を少しでも是正することは、将来の日本にとって少なからず役立つはずである。

しかしここではそうした一般論を離れて、ヨーロッパの「周辺地域」、特に筆者もこれまで対象としてきた東欧史の研究には、具体的にどのような意味があるのかを考えてみることにしたい。東欧の歴史は、日本人に直接かかわるところは少ないように思われるが、我々が特にそこから学ぶことがあるとすれば、それは何であろうか。<sup>1)</sup>

## 2、「リアクション」としての東欧史

現在までのところ、東欧の歴史の中で、特にどのような領域が日本の研究者の関心を集めてきたか、いいかえれば、日本の研究者たちはどのような観点から東欧史にアプローチしてきたか。本稿では、民俗学や文学の研究などを一応対象外としておく、それ以外の歴史研究をきわめて大雑把な形でまとめみると、おおよそ次の5つの関心領域が浮かび上がってくると思われる。すなわち、1、ナショナリズム（民族主義）研究、2、外交史研究（ないし国際関係論的なアプローチ）、3、冷戦時代の「東欧独自の社会主義」に関する研究、4、東欧の「遅れ」の原因を社会経済史的に分析する研究、5、ハプスブルク帝国などいわゆる「多民族帝国」における統治および社会的統合のありかたをめぐる研究である。以下、これらの研究についてごく簡単ではあるがその性格を考え、同時に、近年のものを中心に、主要な研究業績を紹介してみよう。ただし、筆者はこうした分野について特に研究を深めているわけではなく、紹介する業績も、筆者が参照できたもの、しかも比較的広い範囲の読者を想定したものが中心となる。

まずナショナリズムであるが、東欧という地域が、複雑な民族構成から成り立ち、しばしば民族紛争に見まわれる不安定な地域であるという認識は、多くの人に共通していると思う。旧ユーゴスラヴィアで1990年代になって生じたような泥沼化した紛争を見ると、あたかもこうした民族どうしの争いは東欧という地域の宿命であるかのようにさえ受け取られることもある。さまざまな紛争の原因を「民族の違い」という究極的に説明不可能なものにおしつけてしまったのでは、学問的研究は進展しないが、しかし東欧の歴史が、この「民族」というどうやっても定義できない不可思議な存在を抜きにしては語れないこと、あるいは東欧に住む人たちが自身が、この「民族」という概念にかかわることなしには生きていくこともできないような状況に陥っていたこともまた、事実である。

東欧にそうした状況が生まれたのは19世紀であるという理解は、ほぼ問題なく受け入れられている。それは基本的には、次のように説明される。フランスやイギリスなど西欧諸国では、すでに18世紀までに国家の統合が完成し、その中でフランス国民、イギリス国民という概念も、特に不自然に感じられることなく形成された。しかし東欧では、それぞれの地域に自前の国家がなかったために、人々は、共通の言語、宗教、歴史的体験などをよりどころにして、人為的に民族という概念を作り上げなければならなかった。こうした民族概念は、人為的、観念的なものであるだけに、人間に強制的に働きか

ける力が強く、また、明確な地理的境界線を伴わないために、周辺の「異民族」との紛争を容易に引き起こすことになる。このように、民族とはそれ自体が多くの問題を含む概念である。しかし、東欧の多くの「民族」が、この民族概念を基盤にして、20世紀になってそれぞれ独立し、自前の「国民国家」を曲がりなりにも成立させたことも確かである。このように見てくると、東欧の民族主義は、西欧的な国民国家を生み出せなかった東欧の人々にとっての、「自由と自立の獲得手段」であったという側面があることは否定できない。

考えてみると、日本も、19世紀に欧米列強と出会う過程でナショナリズムを生み出した国である。ただし、日本はその置かれた状況から、非常に独善的な性格の強い（そして非論理的要素の強い）ナショナリズムを芽生えさせたのに対して、東欧のナショナリズムは、すぐに隣の民族のナショナリズムと角突き合わせることになる。それだけに、東欧のナショナリズムの研究は、それぞれの民族がそのアイデンティティーをどこに求め、民族意識を育成してきたかを、比較的通じやすい位置にあるといえる。<sup>2)</sup>

次に、外交史、あるいは国際関係論的アプローチであるが、これも魅力的な成果を生み出している。第一次大戦以降の東欧という地域は、西にドイツ、東にソ連という大国を控えた小国家群から成り立っており、外交史や政治史の研究者には興味深い研究領域を提供している。あらためていうまでもなく、第一次大戦後に独立した東欧諸国は、ドイツ第三帝国の東方拡大、第二次大戦における占領、冷戦の開始などといった激動の直接の舞台となっており、その中で、いわば小国としての生き残りをかけた、緊張に満ちた外交戦略が展開された。特に冷戦期に関しては、少しずつではあるが最近ようやく史料が公開され始めており、新たな研究成果が期待される分野となっている。そうした研究に触れる時、我々は、陸上の国境線を全く持たない日本と引き比べて、東欧では国際関係という言葉自体が違った意味を持っていることに気づかされるのである。<sup>3)</sup>

次に東欧の社会主義は、その独自性が専門家たちの注目を集めてきた。特に旧ユーゴスラヴィアにおける、ソ連とは一線を画した自前の社会主義体制にある種の将来への展望が託され、さらに、物質的な豊かさもある程度実現させたハンガリーの体制なども注目された。これらの研究は、1989年の東欧革命<sup>4)</sup>、そしてそれに続くソ連邦の崩壊によって、一時期は、その意義を見失ってしまったかに見えた。しかし、冷戦という重圧がなくなった今こそ、社会主義的価値観の意義というものを、もう一度考えなおさなければならない時期にきているという認識もある。それに、社会主義時代の東欧、特に1940年代後半に東欧諸国が社会主義体制を採用していった経過などは、一つの歴史的過程として今後捉えなおさなければならないであろう。ソ連や東欧における社会主義体制は、西欧のような近代化に遅れをとった国々が、別の方法でこれを達成しようとしたという側面を持っていることは、否定し難い事実だからである。<sup>5)</sup>

ここまで見てくると、東欧史の研究は、外部の世界、特に西欧に対する一種のリアクションとして東欧に生じたさまざまな問題を扱うという性格が強いことに気づく。西欧的な国民統合を実現できな

かったこと、「民族」ごとに小国として独立せざるをえなかったこと、西欧のような社会と産業の近代化に立ち遅れたこと、これらが東欧の人々に、外部の世界に対するさまざまなリアクションを起こさせた。我々はそのリアクションを分析し、解釈を加えることによって、西欧のすぐ隣に位置しながら、どうしてもその後を追う形になってしまった東欧という地域の、独特な歴史の展開をたどり、近・現代の世界の流れをより多角的に理解するための重要なよりどころとしているのである。

こうした理解には一つの前提がある。東欧は、ある時点で西欧よりも遅れた地域として取り残されていったということである。通常、こうした西欧と東欧の歴史の分岐点は16世紀に求められている。その違いがいかんして生じたかを社会経済史的に分析することは、東欧史研究のもう一つの重要な課題であり、特に封建制から資本主義への移行過程に関する議論と関連してすでに長い研究の蓄積がある。概略だけ記せば、以下のとおりである。西欧では近世の初頭に封建的な束縛の強い社会が解体して市民社会が形成され、これを基礎として資本主義化、工業化の条件が整った。しかも絶対主義期の国家そのものが、商業や工業による富の増大を必要とした。一方で東欧は西欧の発展のための農業の後背地として位置づけられ、16世紀以降、封建領主による土地と人民の支配はかえって強められ、いわゆる再版農奴制が出現した。しかもこの時期に東欧では中世以来の国家が解体し、オーストリア、プロイセン、ロシア、オスマン帝国などの帝国の支配下に入り、西欧のような強力な絶対主義国家を自前で生み出すことができなかった。こうして東欧はヨーロッパの「裏庭」的存在になっていったというわけである。

そうして19世紀になって、西欧とは違う自分たちの姿に気づいた東欧の人たちが、これにいかんに対処したか、あるいは20世紀になって独立を獲得した東欧が、こうした「遅れ」をどのような形で引きずっていたか。広く捉らえると、多くの東欧史研究にはそうした共通する問題関心があるように思われる。

そして最後に、やや異なった視点として、近世に入って東欧の広い地域を包含する形で成立し、ほぼ第一次大戦終了まで続いたいくつかの「帝国」が、言語、慣習、歴史、宗教の異なる諸地域をいかに統合したかという研究がある。特に近年のこうした研究においては、それらの帝国の支配が必ずしも抑圧的な専制ではなく、地域ごとの差異を認めたうえでそれなりに柔軟な社会的統合をめざすものであったことが、強調される傾向がある。特に、1989年の東欧革命でソ連の影響下の「一枚岩の東欧」が崩壊した後、東欧に新たな秩序の構築が求められ、また一部に「民族紛争」が生じるという事態になると、ゆるやかな国家統合のモデルとしてのかつての「帝国」に今一度注目するという動きも見られた。特にハプスブルク帝国に関しては、その華麗なイメージも手伝って幅広い関心が寄せられている。実際、ほぼこの帝国の支配下にあった地域が今日再び「中欧」という名のもとに共同歩調をとる傾向があることなどから見ても、この「帝国」が残した刻印の大きさがしのばれる。もちろん、東欧の将来像と歴史上の帝国をオーヴァーラップさせるのは単なる懷古趣味にすぎない。しかし帝国史研究は、中欧独自の社会的統合と国家統合のあり方を歴史的に解明するという意味で、中欧という地域

の特色そのものに一定の積極的な意義を見出だそうとする性格を持っている。また別の見方をすれば、帝国史研究とは、20世紀初頭までの東欧が、「諸民族の複合体」という近代国家形式にとっては不利な条件下で、いかに近代的社会と国民国家を作ろうとしたかを問題としているわけであって、これも広い意味では一種のリアクションの研究であるといってもよいだろう。<sup>6)</sup>

筆者は、16世紀を境にした西欧と東欧の分離は重要な事実であると考え、長い目で見れば、それが今日の東欧にも影を落としていることも確かであると思う。そしておそらく今後も東欧史研究は、西欧に遅れをとった地域の人々のさまざまなリアクションの中に、研究の主要な意義を見出だしていくであろう。確かにこれらの研究は、いずれも今日の東欧が抱える問題に直接つながるものであり、一層深められていく必要がある。東欧の平和と安定は「民族の共存」の成否いかにかかっているといっても言い過ぎではないし、外交や国際関係が東欧の政治に占めるウェイトは今後ますます高まるであろう。一時は否定されたかに見えた社会主義の理念も、東欧の社会に含まれるさまざまな問題への対応の一つとしての有効性は失っていないように思われる。

### 3、東欧研究独自の「価値」を求めて

しかし、以上のように現在の東欧史研究の意義をとらえたうえで、なおかつ筆者は、東欧史研究の役割はこうしたリアクションの研究以外のところにもあるのではないかと考えている。それは、歴史研究の意義というものは、何らかの形で現代の状況と直接つながりのある事象を解明することだけでなく、現代には受け継がれなかったもの、あるいはそのもの本来の姿は忘れられてしまったが、底流となって現代に深い影響を与えているものを、可能な限り再発見し、再構成することにもあると思うからである。歴史の中に埋もれてしまった、人間や社会に関する通念、あるいは自然観、世界観などを再び掘り起こしてすることで、逆に現代という時代の特性を照射することは、非常に困難な作業ではあるが、歴史研究の重要な課題のはずである。

では、そのような観点から東欧史を見た場合、そこから何を読み取ることができるのだろうか。まず我々は、近世以降、東欧が西欧の後背地として位置づけられたということそのものを、少々突き放して観察してみる必要があるだろう。そうした区別に必要以上にとらわれると、近代へと発展していく西欧と、取り残されていく東欧という観念を、無批判に歴史研究に持ち込む危険が生じるからである。そして、両者が別の道を歩み始める16世紀以前をも視野に含め、空間的にも広がりをもったヨーロッパ全体を見つめることが大切であるように思われる。そのように観察した時、我々は、発展していく近代西欧の中には受け継がれなかったが、東欧独特の状況の中で生み出され、独自の積極的な価値を備えていたものを発見することができるのではないだろうか。<sup>7)</sup>

では、具体的に東欧という地域の持っていた積極的な役割は、たとえばどこに見出だされるだろうか。現在のところ、筆者はおよそ次の3つを特に研究すべき対象として考えている。ただし、筆者は東

欧全体を対象としているわけではなく、おもにチェコ（ボヘミア）周辺に特に関わるものであることをお断わりしておきたい。

まず一つは、宗教改革期の東欧である。ハンガリーやトランシルヴァニアなどの国々が、当時ヨーロッパで有数のプロテスタントの優勢な国であったことは、日本の研究においてはいまだにあまりよく紹介されていない。そもそも東欧における宗教紛争は、ドイツ以西とは大きく異なった道を歩んだ。西欧では、どの国がどの宗派を採用するかは君主の一存で決められたのに対して、国家による統合力の弱い東欧では、多数の宗派の共存を認めることこそ紛争を解決に導くという考えが強かった。これは、以前には、東欧の身分制社会が持っていた自由の観念を示すものとして必要以上に賞賛されたり、逆に絶対主義権力の形成を阻害した要因として断罪されたりしたが、そのような先入観を離れて、絶対主義形成期のヨーロッパが持っていた一つの選択肢として解釈しなおす必要はあると思われる。

もう一つは、上のことにも関連するが、東欧における絶対主義のありかたである。特に、16～17世紀のハプスブルク家による絶対主義の形成に関して、近年、イギリスのR. J. W. エヴァンズが注目すべき研究を行なっている<sup>8</sup>。それは、単に東欧（中欧）では民族や宗教の分布が複雑なために、西欧とは違った「ゆるやかな統合の絶対主義」が成立したという主張にとどまらず、この雑多な地域の絶対主義的統合を支えた精神世界の中身にまで深く分け入るものになっている。現実のハプスブルク帝国は、ついに西欧諸国のような統合を達成しえなかったが、それがかえって、観念の世界における強力な統合理念をこの地域の人々の間に育んでいった。それはこの地域におけるカトリック教会の優位と結びついて、ウィーンの宮廷を中心とする華麗なバロック文化という形で花開き、都市から農村までくまなく覆い尽くし、現在にいたるまでこの地域の景観の基本的要素になっている。我々は、ウィーンを中心として西欧と東欧にまたがって広がる共通した一種の「香り」のようなものの正体を、こうした研究によってかなり具体的に知ることができる。

最後に、東欧の特性に関してはユダヤ人の存在を忘れることはできない。ポーランドやロシアはいわゆるアシュケナジム（ドイツ系ユダヤ人）の多い地域であった。そこは中世以来、迫害されて西欧から移住してきたユダヤ人の一種の避難所であり、当時としては稀に見るほどユダヤ人に好意的な法令なども作成されていたのである。もちろん、凄惨な迫害の歴史があったことも忘れてはならない。19世紀以降の東欧におけるユダヤ人の活動についてはすでに専門的な研究が日本にもあるが、それ以前の社会においてユダヤ人がどのような存在であったのかは、あまり知られていない。恐らく、西欧だけの研究からは見えてこないヨーロッパ史の別の側面が、ここからは浮かび上がってくるはずである。

ここにあげたのは、東欧史から我々が何を期待できるかについての、ほんのわずかな例に過ぎない。もっと視野を広げることによって、さらに多くの有意義な研究対象が見つかるであろう。筆者がここで強調したかったのは、東欧は、確かに近世以降はヨーロッパの「裏庭」であったかもしれないが、そこに住む人々にとっては、まぎれもない生活の中心であり、独自の世界を築いていたはずだということである。歴史の研究は常に、それぞれの時代や地域の持つ固有の性格に向き合いながら進められな

ければならないと、考えるからである。

註

- 1) ただしここでは、東欧とはどこを指すかという概念規定の問題には、あえて触れないことにする。どの時代の、どの側面を見るかによってこの概念には大きなずれが生じ、本稿であつかうにはあまりに複雑な問題が含まれるからである。それでも大体の範囲を特定しておく必要があるとするならば、ほぼ1989年まで社会主義体制をとることによって西欧から区別され、しかも旧ソ連邦には含まれなかった地域、とうことにしておきたい。東欧の現代史については、木戸蕨『激動の東欧史』中公新書、1990年。
- 2) 以下、広い範囲の読者を対象としたものを中心に、筆者が参照した範囲内で、参考文献をあげることにする。東欧の民族主義の形成と特色を各国別に詳述したものとして、翻訳であるが、シュガー、P. F.、レデラー、I. J. 編、東欧史研究会訳『東欧のナショナリズム』刀水書房、1991年がある。また、こうした「民族問題」を引きずる東欧を、1990年代以降の新しいヨーロッパの中にどのように位置づければよいかを考察したものとして、羽場久渥子『統合ヨーロッパの民族問題』講談社現代新書、1994年がわかりやすい。旧ユーゴスラヴィアの内戦に関しては、千田善『ユーゴスラヴィア紛争』講談社現代新書、1993年が、現場の状況をよく伝えている。
- 3) 最近の研究成果にもとづいたものとしては、たとえば広瀬佳一『ヨーロッパ分断1943、大国の思惑、小国の構想』中公新書、1994年。また、東欧の国際状況の中での一国の独立の過程を扱ったものとして、林忠行『中欧の分裂と統一 — マサリクとチェコスロヴァキア建国 —』中公新書、1993年。
- 4) 1989年の東欧革命については多数の参考文献があるが、概略を知るには、南塚信吾、宮島直機編『89・東欧改革』講談社現代新書、1990年。また、実際に改革に関わった人たちの視点を伝えるものとしては、ベレンド、イヴァン・T.、河合秀和訳『ヨーロッパの危険地域』岩波、1990年。ハヴェル、V.、飯島周訳『反政治のすすめ』恒文社、1991年。
- 5) 南塚信吾『ハンガリーの改革 — 民族的伝統と「第三の道」 —』彩流社、1990年。
- 6) ハプスブルク帝国については、コーン、H.、稲野強他訳『ハプスブルク帝国史入門』恒文社、1982年。ハプスブルク帝国下の社会的統合に関しては、大都留厚『ハプスブルクの実験』中公新書、1995年。また鈴木薫『オスマン帝国』講談社現代新書、1992年も参考になる。
- 7) 東欧を視野に収めたヨーロッパ史は必然的に、東方キリスト教世界をその範囲に取り込むことになる。逆に、広く西欧からロシアまでを視野に収めた次の歴史研究が、東方教会を専門とする宗教史家によって書かれていることは示唆的であろう。森安達也『神々の力と非力』平凡社、1994年。また、聖心女子大学キリスト教文化研究所編『東欧・ロシア、文明の回廊』、春秋社、1994年に収められた森安氏の巻頭文「(総論) スラヴ・東欧世界へのアプローチ—均質性と異質性」3～18頁は、

東欧をどのようにとらえるかについて、きわめて要を得た議論を展開している。

- 8) R. J. W. Evans, *The Making of the Habsburg Monarchy 1550 – 1700. An Interpretation*, Oxford, 1997.